

## (III) 講

演(主なもの)

演題	年月日	所	内容
南方佛教圏の藝術 印度に於ける政治と宗教	昭和一七、三、二〇 ク 一七、九、一五	岡崎公會堂 東本願寺議事堂	南方佛教圏に存在する各種の藝術の紹介 印度に於ける政治と宗教との不可分離なることを述べ ベガンダーの思想と生活を述べる

## (IV) 隨筆

演題	年月日	所	内容
澄水記21、妹を悼む	昭和二二	教學一ノ一、一 ノ二	那賀義利のペンネームにて戦災バラックに於ける 田園生活と妹の死について書いてある

## 龍山章眞先生の死を悼む

佛教學研究室 雲井昭善

本年二月二十五日、龍山章眞先生逝去さるの悲報は、學園にとつて洵に痛恨事であつた。ドイツ留學より歸朝されて以來永らく、病床に呻吟されてゐた先生を想ひ、

只管その御快癒の早からんことを念願してゐた矢先、而も、昨今やゝ小康を得られたかの様に仄聞してゐた折とて、この突然の悲報は言辭に盡しきれない。思へば、過ぐる昭和二十年三月の戦災によつて堂塔伽藍を焼失され、加へて貴重蔵書の大半をも灰燼に歸されたことが、先生の胸奥に大きな傷手となつて、今一步の回復を取戻されなかつたのではなからうか。その上、戦後の社會狀勢の急變は、先生を病床に安靜するを許さず、寺

院の移轉に伴ふ復興等、矢次早やの事業が遂に決定的な疲勞をもたらしこの悲報となつたのであらうかと惜まれる。學園に於て、又、本邦印度學々界に於て、數少ない學者の中で、特にその堅實にして而も旺盛な學究精神の満ち／＼てゐられた先生を失つたことは、惜みても猶餘りあることである、先生が再度母校の教壇にたゞれて、後學の徒に道を示されんことを念じ續けたのも、今は泡沫の如くに消えてしまつた、今は先生の御冥福を衷心から祈りつゝ、學園に於ける在りし日の姿を想ひ起して、以下追悼の一文を捧げたい。

先生から教をうけをのは、當時予科専門部に於て印度佛敎史を講義されてゐた時からである。その頃、印度佛敎史に關する適當な教材がなく、先生もこれを痛感されて、後日、筆を執られたのが印度佛敎史概説（著書3その追補7）である。先生の學問の方向を眺めると、大略（一）研究科時代（昭五—七）（二）留學以前（昭和七—十三年春）（三）歸朝後（昭和十五年以後）に分けて考へると思ふ。

（一）先生は學部に於て原始耆耶敎を研究され、その後

主として研究の方向を印度哲學へと向けられた様である。そして、特に佛敎と關係のある學派に焦點をおき、その印哲資料から佛敎の相を浮き彫らんとされた。そこから生れたものが、論文①②③④⑤⑥⑦等である。そのうち、⑥⑦は、所謂、ベーダンタ學派の巨匠として、又假面の佛敎徒（prachana-buddha）とさへ言はれたシャンカラ論師のベーダンタ經註釋の研究であり、研究科時代の中心課題もこの邊にあつた様に思はれる。

（二）昭和十一年學部助教となられた前後は、依然、前學年よりの研究を續けられ、ラマスヂヤの「吉祥註」和譯寂護の「實義要集」我論批判の研究等、廣く梵語テキストから佛敎批判の態度を探り出さんとされた。そして、常に目を海外諸研究家の著作に向けられ、求めうる資料は大略目を通してゐた様である。論文⑧——⑬等はこの頃の作品である。それらは、結局「印度に於ける異敎徒の佛敎批評」といふ一點へ目標をおかれたことに他ならぬ。

昭和十三年七月から約一ケ年に亘つて、ドイツライプチヒ大學に留學され、歐洲各國の佛敎研究の狀況を詳に

視察され、愈々その視野を廣くされるに至つた。然しその頃から漸次、健康を害されてゐた様であり、剩へ、夫人に死別されるといふ逆境に立たれたのもこの當時である。(三)歸朝後は、その研究方面も方向を轉じ、佛教史特に、後期印度佛教史の跡づけ、南方佛教圈の事情など、その博識によつて手際よくものされ、論文<sup>⑭</sup>——<sup>⑳</sup>等の諸研究を發表されたのである。その間に出された著書としては、4——7等がある。

以上、先生の諸論文から、その學風を大きく把へると  
一、印度哲學關係のものとしては、佛教と關係のある面を、

二、歴史的なものとしては、中世、後期印度佛教、南アジアの佛教事情を

明らかにする、この二つに分類されると思ふ。そしてその特色としては、資料の扱ひ方が廣範圍に亘つており、且つ海外佛教研究家の動きに關心を寄せ、その紹介には實に勝れた手腕をもつてゐられた。著作5、7、等に見られる様に、極めてスッキリした全體の構成から、その資料を網羅せる點に於ては、蓋し先生の特技とさへ

見られるのである。これらは、一にその豊富な知識の結集であると言はねばなるまい。

歸朝後、學部に於て講義をうけた中に經集(Suttanipita)の講讀があつた。その際も、本書に關する資料を總て教室に持つて臨まれ、一々の紹介、參照をされたことは、先生の學風の一面を物語れるものであり、又、私にとつても忘れえぬことの一つである。

先生は極めてセンスの細かい、そして一倍に神經質な方であつた。その一面が隨筆となつてよく表はれてゐる「法藏」「聖財」「本願」等の諸雜誌に、その特異な筆致の一端を窺ひうるであらう。

さは言へ、今は既に先生の姿も學園に見られなくなつた。勝れた指導教授を失つたことを惜みつゝ、この一文を草した次第である。

(二五・五・一〇記)